

# 国際交流レター 第3号

## 第1回MUS研修視察団受け入れを終えて



来学したMUS研修視察団の一行

### CONTENTS

実行委員長挨拶	清野 健…	2	MEMORIES in KUMAMOTO……	9
研修視察団団長挨拶	ジェームズ・リー…	2	モンタナ旋風あれこれ	杉山日出夫… 11
自信	ロバート・スウィンス…	3	MUSの学生たちとの交流	清田忠臣… 12
企業体験入社報告……………		4	子どもたちにも国際交流を	小幡安信… 14
本田技研	熊本相互銀行	金 剛	ホストファミリーへのアンケートから……	15
鶴屋デパート	ニュースカイホテル		中東問題研究会開催さる……………	16
RKK	肥後銀行	熊本県庁	中国との交流および海外からの訪問者……	17

## 実行委員長挨拶



経済学部教授  
清野 健

去る7月15日に、私は中野裕治助教授（実行委員会事務局長）と一緒に、すでに在京していたモンタナ大学システム研修視察団を引率して、東京赤坂のアメリカ大使館を訪問した。マンズフィールド大使に会って、無事に研修視察の日程が終了した事をお伝えした。そして、大使の1時間余りに及ぶ日本についての熱心な講義を一行と共に拝聴した。その中で、大使は「研修視察の成果をモンタナ州の人々と分つべきである」と強調し、日米間の相互理解に役に立つよう要請した。

それから、我々は大使館の前庭で「来夏モンタナで」と言葉を交して、一行に別れを告げた。かくして、長いようで短かった実行委員会の仕事に終止符を打ったのである。

振り返れば、実行委員会が設立されて以来、委員の諸氏には、大変な量の仕事をお願いし、また多くの方々の協力を要請した。仕事はすみやかに遂行され、協力は惜しみなく与えられた。これらの事に対し、委員の諸氏と協力をして下さった方々に、この紙上をかりて、あらためて満腔の感謝と賛辞の意を表したい。

去年の7月に、我が商大とモンタナ大学システム並びに他の3私大との姉妹関係設立の調印以来、「祭りは終わった」という思いが我が私の脳裡にあった。したがって、今後は、如何に国際交流を日常化の軌道に乗せ、着実に発展させる契機を作り得るかが、我々が自ら

に課した命題であったと思う。それ故に、今後のため行動の記録を出来る限り多く残すべく、また研修視察団の潜在が有意義であるように努力したつもりである。

反省会で議論されたように、プログラムを工夫する必要があること、動員体制を整備すること、そして交流事務局の設置の緊要なこと等、今後課題を残しながらも、初回としては、まずまずの成果をあげる事ができ、曲りなりにも、将来の交流への礎を築くことが出来たのではないかと考えている。

終りにあたって、県・市、県内各企業の方方、そしてホーム・ステイを引き受けて下さった方々に、この紙上をかりて心からの感謝を申しあげると同時に、今後ともご協力を賜るようお願いしておきたいものである。

秋の訪れとともに、国際交流委員会の規約が作成されつつある今日此頃である。蒔かれた種子が、これから先益々盛大な交流と相互理解と言う美しい果実を結ぶ事を期待したい。

## MUS研修視察団団長挨拶



モンタナ州立大教授  
ジェイムズ・リー

人間関係の始まりにおいて肝心なのは、最初の出会いとお互いの働きかけである。それは、その関係が続いたり、次第に深まっていくに従って将来の交流全体の基準と心構えとといったものを決定するからである。

モンタナと熊商大の交流プログラムの最初の出会いは、我々モンタナからの派遣団全員の期待を大きく上回るものであった。スケジ

ルールは、細微にわたる大変な努力と我々のニーズに対する深い理解を反映するものであった。また、この計画作成に当たった人々の努力と配慮に加えて、我々が在熊中に接した総ての人々の心からの歓迎があった。熊商大の教職員はじめ、学生諸君、ホスト・ファミリーの方々、我々の体験入社と見学を承知して下さった企業、そして店のご主人や街で出会った人達に至るまで、熊本の総ての人々から親しく心を開いて迎えて貰ったことは、我々のこの上ない喜びであった。人と人との多く

の重要な関係において、その関係が旨く行くためには、単に「知り合った」ということ以上にハートが大切である。このことは、今回の我々のケースに最も良く当てはまる。これからの数年間は解決すべき多くの疑問や問題が横たわっているかと思われる。だがそれらの問題は、結局、我々の気持によって克服可能だと確信する。ほんとうに大切なことは、我々の心が一つとなり、お互いがこの関係を実り多い、永続的なものに作り上げる様努力しつづけることである。



## SELF-CONFIDENCE (自信)

モンタナ州立大教授 ロバート・スウインズ

今回の交流プログラムには、幾つかの目的があったと思われます。そのひとつは、必ずしも明白な目的というわけではありませんが、MUSの学生諸君に対してそれぞれが自信をつける様な機会を与えてやることだったという気がします。

場所の移動は極めて旨くいきました。また、全く異なる言語を用いて自分の欲することを他の人々に伝えることも出来ました。そして何よりも、友達をつくることによって、われわれが互いに与え合える何かを持っているということがわかり、参加者全員の意気は大いに高まりました。私はモンタナの学生の何人かについては、ずっと以前から知っているのですが、今度のプログラムをとおして彼らの中に起こった或る種の変化が印象的でした。有難うSHODAI!

熊商大の学生諸君がモンタナに来られるときには、私共は同様のことを経験して頂ける

と考えています。モンタナでの体験で、あなた方は独立独歩の精神といったものを体得されるのではないかと思います。われわれは、グレーシャー国立公園の山脈での22キロ・ハイキングに出掛ける計画をもっているのですが、そうすると皆さんは山中の山小屋で夜を過ごすこととなります。各人は自己の責任において行動する訳です。それは管理者になるための貴重な訓練でもあります。つまり、それは個人としての一つの挑戦でありますし、危険を冒しながらも全く新しい何事かを独力で成し遂げた時の、限りない満足感を味わうことにもなるでしょう。

モンタナの学生はあなたがた商大から自信を学ばせて貰いました。そして私達は、商大の学生諸君がモンタナから大いなる独立独歩の精神を学ばれることを期待しているところです。

## 企業体験入社報告

### HONDA GIKEN (本田技研)

フランク・キング

私は日本滞在中に本田技研において一週間の学習、視察および日常業務への参加を体験させて貰った。それは私にとってこれまで学んだことのなかった全く新しい革新的な経営システムの体験であった。朝の体操と社歌斉唱で始まり、一日の終わりには着替えをしながらのロッカー室でのディスカッションという毎日毎日が新しい体験学習であった。

或る日私は職長と溶接作業について色々話し合う機会を得たが、将来はロボットの役割が次第に増加するであろうということだった。徐々にバイク製造の流れ作業についての知識を得、ひとつの製品がどの様な生産工程を経て出来上っていくのか解ってきた。しかしもっと大切なことは、従業員が能率よく上質の製品を生産するように、動作研究、時間研究あるいは心理学を応用しつつひたすら追求されてきたマネジメントの在り方を知り得たことである。能率はコントロール・サークルによって従業員達自身がチェックしていた。

この新しいサークルによって本田の従業員は、現在のマネジメントの在り方に問題があればそれを批判することが出来る。これは、工場の問題点を発見し解決していく従業員の能力を尊重しているという点でアメリカの経営の考え方とは対照的であった。

幾人かの人達と共に宿泊し、食事を取り、労働をすることによって本田の経営システムに対する従業員の考え方を知ることが出来た

し、色々な話をとおして物事を表と裏の両面から把える正しい見方を学んだ様な気がする。また、多くの外国からの研修生とも接することが出来て、本田の経営システムをより総合的に理解することができた。本田での体験入社をとおして私は新しい経営システムを垣間見たに過ぎないかも知れないが、私が日本及び日本人とその文化を学び始めたことだけは確かである。

### KUMAMOTO SOGO GINKO

(熊本相互銀行)

カレン・フェイ・ホイ

日本の企業を訪れ、視察する機会を持てたことは大変素晴らしいことだったとおもいます。企業体験は交流学生にとって最高の学習経験です。銀行側では日常業務の邪魔にならない様にしてジェリーと私をどう参加させるかという点で何かと御苦労されたことと思いますが、本当によくして戴きました。

預金業務やローン部門の視察、そしてコンピューター・センターの見学は大変勉強になりました。特に私は行員達の接客サービスに強い印象を受けました。どの行員も微笑を絶やさず、親切な言葉づかいでした。一般化して言うことが出来るならば、私の知る限りすべての小規模の事業体では顧客との結びつき、そして親しみのある対応の仕方に力点を置いていると思われます。行員が顧客に与えるいつもの印象というものが、通常その企業のサービスの在り方についての考え方を反映するものだということを思えば、これは大切なことだと考えます。

私達は銀行の一員として歓迎され、また困惑するほど沢山の土産を頂戴しました。私は今熊本からの交流学生にも同様に素晴らしい経験をして戴けたらと願っています。

## INTERNSHIP:KONGO

(金剛での研修)

ゴードン・ジョンソン

熊本から離れたいま、(株)金剛での研修が私にとっては最も意義深い経験であった様に思える。そこでの体験は今後何年もの間忘れ得ぬものとなろう。研修に当って実は当初或る種の疑問をもっていた。日本人そして世界に知られた日本の経営技術を学ぶのに僅か4日間というのは短か過ぎたし、金剛の人達が自分達の仕事場に外国人を受け入れて一体どの様に対処するかについて少なからず懐疑的であった。

本当に驚いたことに、私が受けた歓迎は感謝の他ないものであった。研修が終る頃には、私は金剛を去り難かったし、あの素晴らしい人びとと別れるのが辛かった。あの様な強い友情が僅か4日の間に培われたなどと今でも信じられないほどだ。

第一日目から日本の企業の在り方がアメリカのそれとは大いに異なっていることが歴然とした。日本人の行動を目のあたりにする方が、彼らの経営方法について本で読むよりずっとよく理解できたのである。例えば、労働者が会社の駐車場に集まって音楽に合わせて体操をするという様なことは、アメリカでは滅多に見られない光景である。また、金剛の事務室の構造がアメリカの企業とは全く異なっている。一つ一つの机を間隔をとって並べるアメリカの標準的な配置の仕方と異なり、

各部門の机が4つないし6つをグループにしてまとめて置かれている。

最後に私は、会社を視察する幸運を与えて戴いた金剛の皆様に御礼を申し述べたい。本当に親切にして頂き、感謝している。

## TSURUYA DEPT. STORE

(鶴屋デパート)

ブルース・ハンツマン

日本の企業で働く機会を得たことにより、日米企業の実際を比較することが出来ただけではなく、多くの新しい考え方を知ることができたと思う。

直ちに眼に映った相違点は、鶴屋だけではなく殆んど日本の企業における従業員の数の多さであった。日本の販売業務は、客が買物をしている店のコーナーに必ず一人の店員がいるという一顧客対一店員という原則に基づいている。彼らは熱心に客に奉仕し、あらゆる質問に答えんとする。アメリカのデパートではむしろセルフ・サービスが原則である。アメリカでは従業員の数はずっと少なく、彼らはいつでも手伝える様に待機はしているのだが、通常客が買物をしている間、直接客に接触するという事はない。

他の相違点は、日本では経営陣に女性が少ないということである。それにコンピューターの利用範囲がアメリカに比べて比較的狭い様に思われる。日本では結婚か出産時に退職する女性が多い。このことが若い女性労働者の昇進の機会を制約する原因になっている。また、概して日本社会では女性の昇進の機会は少ない様である。

アメリカではコンピューターの利用によって、多くの会社が点数販売方式という直接在

庫管理方法を採用している。一つの品物が購買されると直ちにそれがコンピューターに打ち込まれる。日本ではこのやり方は殆んど見かけなかった。

私には日本とアメリカのどちらのシステムが優れているのかについて断定することはできない。それぞれ利点をもっているからである。しかし、他の国の企業を見聞するという今回の体験は、いつの日か私がアメリカで用いることの出来る新たな知識と考え方を提供してくれたとおもう。

## THE NEW SKY HOTEL

(ニュースカイホテル)

トッド・ブルーワー

今度の日本旅行では色々な体験をしたのだが、旅行の目的が日本的経営について学ぶということであったので、最も意義深いものとして企業体験をあげたい。特にニュースカイホテルでの研修内容は最高だったと言って差し支えない。その最大の理由は、われわれのために計画されたプログラムの豊富さとその構成にある。われわれは日本の文化と企業経営の実際とを同じ程度に組み合わせて見せて貰ったし、われわれに対する職場の人々や幹部の人達の配慮はいずれも素晴らしかった。多くの友人も出来、文化と企業についての理解を深めた。

緒方社長が多彩な事業を営んでおられたので本田技研や日立や東洋工業といった正規のプログラム以外の多くの日本の企業を見学出来たし、また久保山部長の丁寧な説明のお蔭で日本の企業についてかなり理解出来たと思う。この方々には御礼の申し上げようがない位だ。

今後もニュースカイホテルが企業研修プログラムに参加して貰える様、心から希望している。私の日本人についての知識は、この研修をとおして大いに深まった。日本の人達は非常に心を開いてくれたし、この短い期間に分ち合ったわれわれの友情は忘れ難いものとなろう。私は日本の企業と文化について多くのものをありの儘に見せて貰ったと確信している。

私はこの交流計画に参加出来て本当に幸せであった。この交流は始まったばかりだけでも、信じ難い程旨く進んだし、私だけでなく誰もが期待した以上のものだった。重ねてお礼を申しあげたい。そして将来もう一度訪れたいと考えている。熊本からもできるだけたくさんの人達にモンタナに来て欲しい。私達はあなた方の親切なもてなしに答えたいと思っている。

## RKK INTERNSHIP

(RKKでの研修)

リンゼイ・ロス

教科書や講義室を離れて現実の企業の中に身を置くということは、企業の経営方式や様々な活動を直接感じることによって大いに理解を深めることを容易にするし、再認識や新たな関心を呼ぶことにつながる。以下4日間の研修で得た私の個人的な感想、学んだこと、そして私見を述べたいと思う。RKKの経営システムと典型的なアメリカの経営システムとの類似点と相違点は、以下のごとくである。  
〔類似点〕

A) 意思決定は上級管理者の職能である。だが、決定に際して非管理職からの意見やデータを参考にする。

B) 各部門は明確に分割されており、部門間のコミュニケーションは、部長レベルでのみ行われている。

C) 利潤獲得が企業の目的になっている。

D) 予算および記録の保管が重視される。

E) コンピューターの普及に伴うオートメーション化が大きな関心事である。

〔相違点(日本のばあい)〕

A) 意思決定は上層部でなされるが、実施については部下に任されており、上からの干渉は殆んど無い。これは仕事の幅と深さをもたせることになり、個人的責任の増大、ひいては職務満足を増大をもたらしめているとおもわれる。

B) 従業員の知識の広さ。彼らは、自らの職務を良く知っているだけでなく、自分の部門の他の人々の職務も良く心得ている。

C) RKKにおける組織内伝達の推進策:

1. 上司と部下の間の密度の濃い相互関係を保つ。
2. 大部屋で仕事机は間隔を置かず並べる。
3. 部門内での様々な会議

D) 時間に対する関心が薄い。従業員は時間を掛けて仕事を遂行する様だが、同時に退社時間を過ぎても働くことを厭わない。

RKKのスタッフは非常にオープンで、私が知りたい経営情報を快く見せてくれた。しかし、RKKは此処で比較した唯一つの会社であり、これがすべての日本の企業の特徴だと看做すべきではないことを付け加えたい。

最後に、忘れ得ぬこの機会を提供してくれたRKKの人達、そしてこの素晴らしい交流プログラムを組織し、実行してくれた熊商大のスタッフと学生諸君に対し感謝の言葉を申

し述べたい。

## HIGO BANK (肥後銀行)

### テッド・ホイックリング

われわれがこの銀行で特定の職務に就くことは、恐らく出来ないだろうと感じたことを思い出さす。直ちに職務に就けなかったということは、或る意味で期待外れであった訳だが、考えてみれば、われわれは金融業、特に日本の金融業務の経験が無く、第一、日本語が殆んど出来ないのであるから手伝うというより騒動を起すのが関の山であったろう。実際の仕事にでも就いたら、われわれが引き起したであろうミスは銀行が将来に亘って獲得する筈の利益を恐らく上回ったであろう。要するにリスクが大き過ぎた訳である。

そこで後になって分ったのだが、われわれの「研修」は、日本における典型的な新入社員に対するそれとほぼ同じ様なものとならざるを得なかったのではないか。物の本によれば、日本では、組織への一体化を強化し会社の「至上」目的を周知せしめるために、組織への教化、即ち、やや保守的ではあるが極めて徹底した新入社員づくりを行うとある。われわれがこのユニークなプロセスに潜入したのかと思うと驚きと同時に興味をそそられた筈である。幸い日本の金融業と日本の組織の特徴をめぐって米村(ハリ)氏と色々話し合うことが出来た。

日本企業の終身雇用制は、ユックリした職務評価と昇進制度を伴っており、このことが、しばしばアメリカの企業では欠如している従業員間の平等な感覚を生み出している。ハリーの説明に依るのだが、肥後銀行の賃金お

よび昇進制度は極めて一貫しており、すべて（もしくは殆んど）の従業員に対して公平である。個人の能力が考慮される中堅クラスになる迄は、昇給・昇進の唯一の基準は勤続年数である。この一貫した体系の下で従業員達は信頼と和に満ちた雰囲気を作り出し、従って目先の利益を求めて個人的に走る者を出にくくしている。私の見た肥後銀行では、将に協調的で楽しい雰囲気が漂っていた。

もう一つ、各部門の机の配列について述べたい。つまり、仕切りのない大きなテーブル方式の配列である。日本的経営に関する著名な本には、こういう机の配置が生産性を高め、集団責任の醸成に有効に作用してきたとある。だが、私にはこの机の並べ方は集団目的達成のために考案されたものというよりは、単なる空間の有効利用の結果でしかない様に思える。これは日本を訪れて直ちに解ったことだが、道路は狭く、車は小さく、家の中の部屋は多目的に使用され、バスの通路には折り畳みの補助椅子がある。要するに過剰人口のゆえに空間の有効利用が発達しているのだ。かくて、肥後銀行の机の配列は限られた空間の有効利用ということになる。いずれにしろ、肥後銀行でのわれわれの経験は大変貴重なものであり、人々は熊本での他の人達と同様、大変親切であった。かかる機会を可能ならしめた意思決定者に対して感謝の意を表する次第である。

## WORKING IN THE KUMAMOTO PREFECTURE OFFICE (熊本県庁での研修)

デビッド・オハラ

熊本県庁での研修は、限られた時間ではあ

ったが、私に日米両国のシステムの比較をする機会を与えてくれた。これは熊本の経済と日本経済を概観したいという私の希望に添うものであった。私は以前から日本政府が産業をいかにバック・アップしているかについて色々聞いていたのだが、研修中に、日米両国政府の経済成長促進政策は基本的なところでは極めて類似していることがはっきりした。違いは関与(involvement)の程度である。

例えば、アメリカにも中小企業貸付制度があり低金利貸付を行っているのだが、それは財務上の条件さえ満たしておればあらゆる企業が利用できるというものである。これに対して日本政府では、政府が成長を促進したいと判断する精選産業に対し特別の援助を行っていると思われる。日本政府はこれまでこの種の選択的関与を極めて有効に実施して来た。

だが、今後の政府のこの種の関与は、これまで程集中的ではなくなると予測される。その理由は、日本の産業循環がアメリカと同じ道を辿るとするならば、今後の日本経済はサービス業、情報産業、先端技術といった分野に集中するであろうし、こういう分野は重工業と異なり資本投下が少なく済み、従って政府の援助を差程必要としないと考えられるからである。

もうひとつの興味深い点は、不振に喘ぐ大企業への援助である。このお蔭で危機を乗り切るにしろ、倒産するにしろ、それがゆっくりしたテンポで行われることになる。それは政府援助がなければ失業したかも知れない労働者達を救うと同時に、転職への一定の時間が与えられることを意味する。

日本の労働力はアメリカと較べて移動性が



低い。アメリカでは、失職した労働者が新たな職を求めて別の州へ移り住むことは珍しくないのだが、日本では解雇された労働者が別の土地で再就職するのはかなり難しいことの様だ。アメリカの労働力の流動性が相対的に高い理由の一つは、不況業種で危い会社を援助せざるを得ない様な日本と同じ程度のプレッシャーをアメリカ政府が未だ体験していないからではなかろうか。

アメリカでは家族が転勤する度に子供が何度も転校することが珍しくない。ところが日本では、転勤を命ぜられた父親が子供の教

育のことを考えて、何年もの間家族と離れて生活するのが普通になっている。日本では子供の将来の仕事と成功が学校によって決まる度合いがより強く、そのことがアメリカと較べて、子供がどこの学校に通っているかということをも重視させるのである。

熊本県庁で研修したお蔭で、或る程度両国のシステムの違いを観察できた。職員の人達はとても親切だったし、県庁を選んだことに大変満足している。また同じ様な研修機会があれば、私は躊躇なく再び県庁を選ぶであろう。

## MEMORIES in KUMAMOTO

### LIFESTYLES (ライフスタイル)

ミッシェル・マンソン

日本に対して抱いていた多くの期待は熊本での最初の数日間でもろくも破られ、そこにはサムライ、ゲイシャのかわりに驚くほど近代的な社会がありました。私が最初に気づいたことは毎日の生活の一部である食事に対する気くばりで、食卓は、私の目を大変楽しませてくれました。それは日常の生活にもつながり、すべて芸術的、機能的で無駄がないようでした。街角やショーウィンドーは魅力的で、私は箬袋からスーパーマーケットの棚にいたる全てのものに魅せられました。人々は誠実で献身的で私たちとの交流に積極的な態度でした。第2週目のニュースカイホテルでの研修期間中にもその熱意を感じました。従業員は活気に溢れ、仕事に対して献身的で不平を言う人は一人もいませんでした。私はとくに熊本で学んだ忍耐や他の人への思いやり

を忘れず将来に役立てたいと思っています。

### HOME STAY (ホームステイ)

トニー・マーテル

ホームステイの経験は、僕の日本滞在の最も楽しい思い出の一つです。ホームステイはプログラムの中でいちばん未知の部分であり、行く前から期待で一杯でした。そしてホストファミリーの甲斐隆博氏、有記夫人、千絵ちゃん、友一朗くんと新しい友情が始まりました。ホームステイでは音楽、スポーツなど共通の趣味をもっていたせいか、すぐに慣れ、子どもたちとは理屈抜きに仲良くなり、楽しい毎日を過ごしました。日本の文化や熊本の町に順応しようといろいろなことを試みましたがその結果、笑いを誘う多くの出来事を引き起こしました。たとえば、風呂の入り方、タクシーの乗り方、また国際電話局の交換手と呼ばし出したつもりが、消防署や警察にかかったこともありました。あるいはまた、ディ

スコの帰りが遅くなって心配をかけたときでも甲斐家の人たちは快く迎えてくれ、彼らの寛大さには感謝しました。食事はおいしく、また御夫婦とも英語が上手なので、日米文化の比較などについても話し合うことができました。このホームステイは僕にとって何ものにも代えがたい経験となりました。甲斐さん、本当にどうもありがとうございました。

## ONE OF MY IMPRESSIONS OF JAPAN (日本の思い出)

カレン・ライト

1か月の日本滞在中で最初に思うことは、私たちがいかに歓迎されたかということです。それは熊本に着いた最初の夜から、熊本を去る最後の日まで続きました。私たちはあまり期待せず、ただ暑い気候と、我々アメリカ人の一行に対して無関心で義務的にもてなす、といった人々を予想して日本に来ました。しかし、今、私はMSUとKUCの姉妹大学プログラムの一つに参加できた幸運と、友好を深めるための皆さんの努力に対して心から感謝しています。学生交歓パーティー、特別講義、企業研修、ホームステイ、天草旅行等の素晴らしい行事がうまく日程に入り、すべてが私たちにあって新しい経験でした。私たちは果たしてこれほどの親切に報いることができるかどうか心配ですが、商大の皆さんがアメリカに来られたときも同じように歓迎し、もてなすことができるよう願っています。皆さんが今後もモンタナの学生を快く受け入れて下さるよう望みます。私はこのプログラムが、両大学の交流を深める重要な手段であり、また両国の文化のかけ橋となって今後ますます親密になることができると確信しています。

## IMPRESSIONS OF JAPAN

(日本の印象)

マージ・スウィンス

(スウィンス教授夫人)

1. 熊本商科大学：教員は勤勉且つ研究熱心で、多分アメリカの教員より良く働いているのではないかと。スタッフ、特に桃井さんと坂本嬢は大変良く気が付くし、生き生きと働く。モンタナの職員がこれ程外国人の習慣やニーズに通じているとは思えない。
2. 熊本の町：熊本は広く、人や車のスピードが速く、はじめは冷たい感じの町のように見えたが、次第に生活のリズムはモンタナと差程変わらないことが判った。大きな違いは人口(州都ヘレナの人口約3万人)である。
3. 宗教：アメリカでは日曜日に教会へ行く習慣があり、キリスト教が道徳の基礎になっている。日本の宗教習慣は不可解なところがある。つまり、多くの人々は仏教や神道の信者という訳ではないが、その教えは伝統的な祭りや儀礼の中に浸透しているとおもわれる。
4. 茶道：茶道は本来自己の精神的静寂を求めるものとして始まったということだが、今日では、特に女性の交流の場を提供しており、社交的な役割が強く、アメリカの婦人グループの場合と似ている。
5. 平和運動：日本人は広島や長崎の体験から強い反核感情を持っているが、その割にはあまり組織だった国際的反核運動は見られない。この問題に関する日本の国際的影響力を日本自身、過小評価しているのではないだろうか。

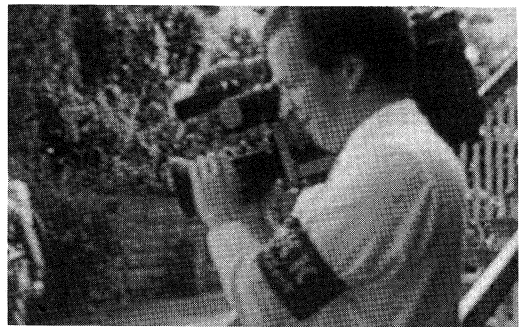
6. 空間：日本人は物理的環境にはあまり執着しないで、家の中や庭そして自分自身の内面の中に空間と静寂を求めている様だ。他方、モンタナでは荒れた自然を空間にあって、その中で住居や庭などの外観に気を配っている。
7. 女性：日本における女性の生活は、男性社会から切り離されたところにある。アメリカの女性ほど自己主張が強くないが、そういう状況を変えていこうとする動きはある。他方多くのアメリカの女性は、社会における専門的役割を積極的に求めている。だが、女性の賃金に関してはいずれの国においても不当に低い様である。
8. 意思の伝達：アメリカの方が日本人より解放的で、思ったことを何でも素直に意思表示する様である。
9. 贈り物：アメリカでは日本ほど頻りに贈り物をするのではない。特にビジネスマン、政治家、同僚の間では殆んど見られず、贈り物は家族や友人に特別の日や、何かの御礼として与えるものだと考えられている。
10. 健康と食事：アメリカ人はお米より肉をよく食べ、メキシコ料理とかイタリア料理の様なものを好む。また日本人と同じ位に Junk Food (高カロリー・低栄養価食品) を食べるが、最近健康的な食生活への関心が高まっている。

## —体験入社受け入れ企業より— モンタナ旋風あれこれ

熊本放送 秘書室次長 杉山日出夫  
秘書部長

6月7日、田島国際交流委員長が来社され、MUS研修視察団の体験入社受け入れの依頼があった。さっそく常務会に諮り、モンタナ大学のリンゼイ・ロス君およびグレン・フェルサム君(いずれも23才男子)2名の受け入れを決定。直ちに4日間の研修期間の日程作成に入る。

経営学修士課程在学中の大学院生ということなので、経営意思決定の過程を正攻法で学ばせるか、或いは放送局の情報提供機能を知するために現業各部門を直接体験させるか、期間中の当社全体業務に関わることなので、慎重に考えた。おりしも「株主総会」、「取締役会」、「局部長連絡会」等が目白押し、とはいえ日本の経営慣行・実情からそのいずれ



カメラワーク良好のMr. フェルサム

も外国人学生を参加させることは困難である。

検討の結果、分かり易く説明し易い形で実施する、質疑応答の機会を適宜持つ、という方針の下で日程を作成。この4日間がどういう展開になったかについて、以下日程を追いながら、両君の研修に当たった当事者の感想をかいつまんで紹介する。

6月28日(火) 9時30分社長訪問、10時～報道部研修 ミーティング・取材

妹尾報道部長談ニミーティングの後、午後は保育園の地震避難訓練を取材させ、「ワイ

ド6」で紹介した。フェルサムのカメラワーク良好。ロスのレポートも「地震ガナイ国カラ来テ驚イタ。地震起動車ノ揺レハ暴レ馬ニ乗ッテイルヨウダ」と仲々歯切れがよい。夜はトーフステーキをつつきながら「皆サン組織的ニテキパキ仕事ヲ片ヅケヨク働ク」とお世辞を一言。当方、緊張の一日で少々疲れた。

6月29日(水) 9時30分～金峰山TV送信所見学、1時30分～長嶺町「RKKモダン住宅展(建設中)」会場見学

笠技師長談＝金峰山TV送信所を案内したが、道中の緑と山上から見える海に感動していた姿が印象的だ。好天の山頂で、送信所機能、エリア、人口、地勢等を説明したが、2人とも真面目で好奇心旺盛だった。

安達RKK開発支配人談＝長嶺町「RKKモダン住宅展」建築現場でソーラーハウスを中心に見学させたが、家の敷地が狭いといっていた。やはりモンタナに比べると負けるなあ。

6月30日(木) 9時30分～TV「さわやかワイド」制作助手・出演、11時45分～TV制作スタッフとミーティング、3時～RKK阿蘇保養所見学および宿泊、ミミーキャスター2名同行。

和田TVディレクター談＝23才の若さには「勢い」がある。感嘆、感嘆。

上田経理部次長談＝会計学について高いレベルの質問を受け、私も参考になったが、専門用語の概念、実務処理には日米に若干の差

異があるので、日本の会計学についての予備知識をもう少し持っておいてほしかった。

野添営業促進部部長談＝ロスは質問魔で、県経済、民放動向に関する資料を多数渡したが、今頃きちんと勉強しているだろうか。

7月1日(金) 9時～阿蘇草千里よりラジオ「モーニングダイアル」へレポート、11時～ラジオ制作スタッフとミーティング、1時30分～鶴屋ラジオ「一寸一服」生中継見学、3時～懇談会、続いてお別れ夕食会。

ミミーキャスター談＝ラジオ「モーニングダイアル」での阿蘇草千里からのレポートは、下界の暑さと山上の寒さの対比が絶妙で私たちも勉強になった。夜はおとなしくしていた。

溝口RKK学苑事務局員談＝通訳で2日間つき合ったが、2人とも好青年の一語につきる。

秘書部佐藤公子、石黒陽子嬢談＝RKKにモンタナ旋風を巻き起こして行った彼らは、大変さわやかで社交的な青年。勉強と遊びの両立がとても上手だった。

以上が期間中の両君の行動記録および関係者の談話である。2人の将来にとって当社での体験がなんらかの形で生かされることを願う次第である。

最後に、長期にわたるMUS研修視察団受け入れを実施された熊本商科大学およびその実務に携わられた国際交流委員会のご努力と熱意に心から敬意を表したい。

## MUSの学生たちとの交流

経済学部3年 清田忠臣

去る6月20日、私はいつもとは違う心境で商大に着いた。体育館の前を通ったとき、そ

こには日米両国旗が空高く風に揺れていた。私はそれを見て、ああやっとモンタナからの

学生達に会えると思い、ひどく胸を弾ませていた。数時間後、「アメリカ人に会ったぞ」という友人の声。途端に、もしもキャンパスで突然ペラペラとノーマルなスピードで話しかけられたらどうしようと思った。いつもならクラブの関係上、英語に対しては少しぐらい自信を持っていた私だが、そのときばかりは急に不安を感じてならなかった。けれども今にして思えば、不安を感じたのはほとんどそのときだけだったようだ。

翌日の昼休み、私は学生食堂で彼らを見かけたが、ただ横目で見ていただけだった。体格がいいなあとか、やっぱり背が高いなあとか友人らと話をした。夜になって友人から電話があった。今春、クラブの先輩2人が商大からの短期留学生としてモンタナに行ったこともあってか、モンタナの学生達との話し合いの結果、みんなでディスコへ踊りに行くことになった。電話は友人からの誘いである。彼らとの初めての出会い。最初の不安も吹き飛んで、彼らとすぐに仲良くなれた。それから、いつしか私は友人らと図書館の3階にあったモンタナ・ルームを訪れるようになった。

彼らとの交流はまだまだ続いた。主な行事としては、学生交歓会、市内観光、少林拳の試合見学、県立劇場での歓迎日本文化祭、県主催レセプション、スポーツデー、専売公社見学などがあった。また、私の友人の所に彼らの1人がホームステイをしていたので、遊びに行ったり、一緒に映画を見に行ったりした。彼らに誘われては、よく踊りにも行った。彼らはとてもタフで、私は学外でも彼らと交流を深めた。離熊の日、彼らは熊本駅のホー



なごやかな談笑風景

ムで友人やホストファミリーたちとの別れを惜しんでいた。今、私は彼らとの楽しかった日々のことを思い出している。国内旅行の後、彼らは無事に家族や友人の待つモンタナへ帰ったことだろう。彼らの1人が「是非あなたもモンタナへ来て下さい」と言って、最後に私にくれたのが何とアメリカの1ドル紙幣だった。今でも私はそれを大切に仕舞っている。

最後に、MUS学生との交流で私が感じたことがいくつかある。最も驚いたことは、学生と教授がお互いにファーストネームやニックネームで呼び合っていることだ。また彼らは日本のものが珍しいのか、何にでもすぐに興味を示した。例えば、ある学生は特に日本の剣道に興味を持ったらしく、2週間目の企業体験入社期間中でさえ、ほとんど毎夕、わざわざ商大に剣道の練習に来ていた。竹刀をもらって感激していた彼の笑顔が、とても印象的だ。私はESS部員で、しかも2人の先輩が今春モンタナへ行ったこともあって、彼らと交わる機会も多かったのだが、一般の学生にとっては、交流の機会も少なく、イマイチだったように思う。何はともあれ、我々とMUS研修視察団との交流は、今回は成功に終わったようだ。楽しくて、しかも忙しい3週間であった。

—ホームステイ引き受け者より—  
**子どもたちにも国際交流を**

本学計算センター 小幡 安信

モンタナから23人の視察団が来熊とのこと、当初私たちにはあまり縁がないだろうと思っていたが、ホームステイの案内があった時は少し迷った。しかし他に希望者が多勢いるだろうということでそのままにしていたら、実行委員会の方から是非ということだったので、申込んでみた。これについては家内や子どもたちの期待が大きく、中年になってやや万事慎重型になってきた私自身にとっては意外に思えた。それというのも、56年9月にアメリカ西海岸へ1週間行き、「アメリカには外人ばかりだった」を経験しているので彼等に対する好奇心が薄らいでいたからだろう。

申込んでからひと月あまりは、家族にとってはなんとなく期待の日々であった。とくに1週間前からは1日1日を数える楽しみが加わり、ひいては隣近所や友だちへの自慢すべき出来事となり、ついにはこの楽しみをみんなで分かちあおうということで、子どもたちの歓迎パーティが開かれることになった。

歓迎の当日はドシャ降りの大雨だったが、小2の息子、小5と小6の娘の友だちなど30人以上の子どもたちの熱気で梅雨のうっとうしさも吹き飛んでしまった。

あらかじめ名前と年令の言い方を教えていたら、これまた優等生でほとんどの子どもが目目を輝かせながら一生懸命に彼ラス・フィルナーを見つめながら話しかけていた。ふだんは朝夕テレビのマンガや雑誌ばかりを見てばかりいて、近ごろの子どもは受身的でなん



子どもたちに囲まれたラス君

となくテレッとしていると感じていたので、やっと子どもらしさをみた思いがした。

それからの5日間、子どもたちが学校に行く8時前には「まだラスは起きてこないの?」、夕方5日間のうち3日間はラスが遅かったため、結局は2回ほど夕食を一緒にしただけだった。それでも子どもたちにとっては、デッカイ毛並みの異なった兄さんということでさわったり肩に乗ったりして、まさに触れ合いのひとときであった。彼のスケジュールがいっぱいであったことと滞在期間が平日であったことで、家族ともどもの行楽の一日がとれなかったことが心のこりであった。

5日目の午後、花岡山、本妙寺、藤崎宮をバイクでかけ足案内した。果たして日本の心や歴史、または苔むした古さの一片でも理解できるかなという目で見えていたが、「ビューティフル」というだけで分からなかった。

最近の国際化の中で、生きた実践勉強の機会を得てあらためて国際交流の重要性を身近に感じさせられた。子どもたちにも「一生懸命勉強してクラスで一番になったらラスの所に行かせてやるぞ」と言ったら、いまのところやる気があるみたいだが……。

## ◀◀◀◀ ホストファミリーへのアンケートから ▶▶▶▶

MUS研修視察団の来熊時にホームステイを引き受けていただいたホストファミリーの方々にアンケートをお願いしました。その結果の一部を紹介しします。

### (1) モンタナの大学生の行動および習慣の違いで気づいた点

1. 暑い日でも毛糸の靴下をはいていた。
2. 靴を畳の上に置く。
3. 家の中で縄跳びを始めた。
4. 風呂を使用せず、シャワーを使用していた。

### (2) モンタナの大学生の行動・態度で感心した点

1. 礼儀正しい。 2人
2. 日常的な挨拶をなるべく日本語でするよう心掛けていた。
3. 自分がしたいこと、して欲しいことを遠慮なく表現する。
4. 日本人は「グループ」でなければ行動できない面があるが、モンタナの学生は「個」で行動するので、より主体性がある。
5. 同じ年齢の日本人の学生より精神的に「大人」である。
6. 約束や時間はよく守る。
7. 食事について必ずほめてくれた。
8. 主婦の労働に対しても感謝してくれる。
9. 相手の立場をととても気づかってくれる。
10. 元気がよく、タフである。
11. 自分の意志(自力)で大学生活を送っている。
12. 自分の言った言葉に責任を持つ。
13. チャレンジ精神が旺盛である。

### (3) モンタナの大学生に質問されて説明に困ったこと

1. 日本の企業経営の特徴について。

2. 日本の造船業の将来の見通しについて。
3. 日本とIBMとの関係の将来の見通しについて。
4. 日本人は英語のReadingはできるのどうしてHearingができないのか、又学校でなぜHearingやSpeakingを教えないのか。
5. 家の月収はいくらか。
6. 熊本の労働者の最低賃金はいくらか。
7. 日本の労働者の賃金は低いと思わないか。
8. 女性同志が手をつないで歩くのは何故か。

### (4) 食事について気付いた点

1. ライスにおかずをのせて、ライスと一緒に食べるので、うな丼や親子丼のようなのが良い。
2. ライスやパンは極く少量しか食べない人がいる。
3. 日本の食事は大体なんでも食べてくれた。
4. 人によって日本食がだめな人がいた。
5. 生水はあまり飲まずジュースをよく飲む。
6. 生ものはあまり食べないようだった。
7. ハシの使い方が意外と上手である。
8. 味噌汁を好まない人もいた。
9. ダイエットをやっている人がいた。

### (5) 今回のホームステイの期間(5日間)について

1. 普通である。 8人
2. 短いと感じた。 6人
3. ホームステイの期間は日曜日をはさんでほしい。

その他、ホームステイの希望期間については、8日～30日間程度まで色々な意見あり。

### (6) 楽しかった点、勉強になった点

1. 理解しやすいように簡単ではっきりした英

- 語を話してくれたので「外人とお互いに気持ちを通じあえるよろこび」を知った。
2. 英語が少しでも通じたので、うれしかった。外国人に慣れたというか、いっしょに住んでいるうちに、アメリカ人という気があまりしなくなった。
  3. 英語の発音の仕方など直接教えてもらったので勉強になった。
  4. 家族といっしょにトランプ等のゲームをしたり、美術館見学、ショッピングを楽しんだ。
  5. Yes, Noがはっきりしていて、日本人も見習うべきだと思った。また何事に対しても恥ずかしがらずに挑戦するスピリットのようなものを感じた。

6. 日本の学生は、もっともっと勉強しなければ、と感じた。
7. アメリカやモンタナについて多少理解ができた。

## (7) その他苦勞した点

1. 言葉の問題。
2. 洗濯(色ものの場合)の問題。
3. 食事の問題

## (8) ホームステイ受け入れ費用について

1. 普通であった。 12人
2. 2~3割増であった。 2人
3. そうとうな出費であった。 1人

## (9) 次のホームステイについて

1. 引き受けてもよい。 12人
2. その時になって考える。 3人

## 中東問題研究会開催さる

— ヘブライ大学・アビール教授を囲んで —

海外事情研究所では、去る9月30日ヘブライ大学(イスラエル)モルデハイ・アビール教授(56才)を迎えて「最近の中東をめぐる諸問題」と題する研究会を開催した。氏は修士論文「アラブ・ナショナリズム研究序説」(1960年ヘブライ大)および博士論文「エチオピア地域における貿易と政治」(1964年ロンドン大)以来、主にアジア・アフリカ・中近東の政治・経済に関する著書・論文を多数発表。今日では、ペルシア湾岸域における石油問題の国際的権威者と目されており、今回は3年前に続いて2度目の来日。研究会は午後4時過ぎより約2時間にわたって質疑応答



アビール教授を囲んでの研究会

形式で行われた。教授は①石油価格変動と市場動向②サウジアラビア、イランの政治・社会情勢③ソ連とメジャーの関係、更には④中東から見た日本の戦略的意味、といった質問に対して、具体的数字を用いて答えつつ、80年代の石油需給構造の変化に伴う中東諸国の内外情勢並びに国際的役割の変化について力説した。



## 中国との留学生の交流始まる

この10月、本学より初めての中国への留学が実現した。経済学部3年の永平久雄君が中国広西壮族自治区桂林市にある広西師範大学に留学するもので、これは熊本市が姉妹都市である桂林市との間で行なう友好交流事業の一環である。本年夏、熊本市と桂林市の間で話し合いがまとまり、2名が派遣されることになった。本年が第一次で熊大と商大から1名ずつが選ばれ、約1年間広西師範大学において、中国語及び中国事情の学習に励むことになる。桂林は世界でも有数の風光明媚な地であり、恵まれた自然の中で永平君も充実した留学生生活を送ることができるであろう。同時にこの2名は熊本市民の代表という性格も帯びるので様々な行事等への出席も予想され、この面でも成果をあげ、市民代表としての役割を十分果たすことも期待されている。因みに留学に要する費用はすべて両市が負担することになっている。

一方、本学では本年10月中国より新たに2名の研究留学生を受け入れることになった。

一名は李景芳氏(女性・27才)で、現在広西大学日本語科の教員である。一年間、本学の小川助教授の指導のもとで日本文学を研究する。李さんは既に10月6日熊本に到着し、熊本県日中交流協会の篤志家の家にホームステイして日本での生活を開始している。

他の一名は孫小唐君(28才)で、広西大学理学部数学科を卒業後、独学で企業管理、経営管理を学習し、昨年度の広西壮族自治区政府留学生試験企業管理科目に唯一人合格したものである。その後広西大学留学生訓練セン

ターで約一年間日本語を勉強し、今回の留学となったものである。本学では企業管理、経営管理を中心に研究を行なう。

なお、この2名の留学に関連して9月に本学を訪問した広西壮族自治区代表団の駱明団長より2人の教育をよろしくとの依頼があった。自治区政府の2人に対する期待がうかがわれる。

## 海外からの訪問つづく

本学の国際交流の活発化に伴い、最近、海外からの来訪者が増えている。

7月30日に、韓国・忠清南道の忠南経商専門大学の教授研修団20名が本学を訪問し、キャンパスを見学した。

8月13日には、同じく韓国・忠清南道の大田大学教務課長、朴殷穆氏が北古賀学長を表敬訪問した。

9月16日には、中国・広西壮族自治区の友好代表団5名が本学を訪れ、北古賀学長と懇談ののち、キャンパスを見学した。

10月7日には、南カリフォルニア熊本県人会会長岩岡孝氏ほか3名が、県費留学生受け入れに対するお礼をかねて本学を訪問し、北古賀学長、田島国際交流委員長と懇談した。同委員長が、来夏予定されている本学学生のモンタナ研修の際、帰途ロスアンジェルスを訪ねたい旨述べると、岩岡会長は興味を示し、歓迎の意向を表わした。

また、10月17日には、客員研究員として熊大に赴任した、モンタナ州立大モラスキー教授が北古賀学長を表敬訪問し、国際交流委員会のメンバーと懇談した。

◎国際交流委員会メンバー

商学部長・経済学部長・短大部長・教養部長・教務部長・学生部長・海外事情研究所長  
総務課長・（委員長 田島司郎）

◎同委員会特別委員 清野健・明石喜嗣・中野裕治・西紀昭・有本純

◎「国際交流レター」編集委員 中野裕治・有本純・塚本諄・桃井芳雄・坂本淳子

---

熊本市大江2丁目5番1号

**熊本商科大学**

**熊本短期大学**

〒862 TEL.(0963) 64-5161

---